

退官にあたり恩師を想う

川 島 誠一郎 (動物学専攻)



理学部へ進学してから40年が過ぎましたが、この間、半年間の併任を含む8年間の広島大学理学部在任を除く期間ずっと東大理学部のお世話になりました。研究設備の不足していた昭和30年代から物資豊かで新しい活気に満ちた現在まで、取り立てた不満もなく、自由な学問環境で過ごせたことに感謝申し上げます。しかし時の経つのは誠に早く、「少年老い易く、学成り難し」という諺は私のためにあるのではないかという感慨一杯です。

人生に指針を与える師や書物があるのと同じく、研究テーマを最初に与えてもらう指導教官の学者としての力備はその後の研究生活に大きく影響することが多いでしょう。この点で私は得難い宝に出会いました。昭和6年に2匹のネズミを腹側で縫い合わせて生殖腺の機能を調べた論文を発表して以来、ホルモンの生物学の分野で世界をリードされた本学名誉教授故竹脇潔先生です。テーマの与えられ方は究めて簡単で、「生殖腺は生殖腺刺激ホルモンを消費するかどうか調べてもらなさい」と、ものの3分もかかりません。あとはこのテーマをどう料理しようと全く自由でした。現在はずいぶん進歩したのでこうはいきません。「かくかくしかじかの背景でこのような問題

が未解決である。これら20編ほどの論文を読み状況を理解し、この論文の手法を習得しつつ問題を解いてみないか」といわなければならないのは当然です。しかし、やがて自らを乗り越えて行く学生が育つことを期待するなら、院生の成果をあせらず彼等の未熟さに自主性を与えるべきでしょう。「一将功成つて万骨枯る」はよくないと竹脇先生に教えられたと思っています。これは理学部での基本的精神的土壌をなすもので、決して年寄りじみた懐古趣味ではないつもりです。護るべき伝統を信じています。

先ほどの「生殖腺刺激ホルモン消費仮説」ははじめ全くうまく行かず、1989年、ひょんな現象の発見をきっかけにわかりました。それは、生殖腺刺激ホルモンのある分子種は特定の標的器官に存在する受容体と結合すると急速に細胞内へインターナリゼーションし、細胞膜表面の受容体のダウンレギュレーションをもたらす、ということになりました。ペプチドホルモン受容体について生化学方法を用い、数理解析の結果明らかになった次第で、31年後に恩師の墓前に「先生やはりあの仮説は正しいようですよ」と報告しました。ダウンレギュレーションは、私がずっと興味をもってきた内分泌性のエイジングの問題とも結びついています。エイジング、その末期が老化、は生物と無生物を問わず地球上に存在するものに共通の性質ですが、高齢化社会を迎えるにあたって最近とみに関心の高い問題であります。その生物学も盛んです。1958年、「消費仮説」の証明ができないまま平行して行ったエイジングに関する実験はうまくいき、修士の最後に2編の論文ができました。これも「先生、こんな仕事もやってみたいのですが」と申し上げると、「やったらいいじゃ

ろ」と一瞬の躊躇もない許可の賜物でなくて何でしょう。自分の口から出た言葉の始末は自分でつけなければならないのは院生でも教官でも変わらないから、院生たるもの懸命に努力し、努力を実らせる（つまりなんとか論文公表までもっていくこと）能力も養うことになる。巧まざる理学的教育原理というべきでしょう。

越えることのできない恩師の他の特徴。毎朝7時30分には全員集合（元旦のみ8時30分）してネズミに餌をやるのだが、院生がずぼらで敷堯の定期的交換を遅らすといつの間にか教授が黙って替えてあるのに気づく。院生や助手が学会に出かけると教授が留守役を買って出て餌をやろうとする。やがて飼料の改良に加え、飼育人を雇用して問題がなくなったが、他人には押しつけず自らにのみ厳格なこわい講座主宰者でした。この竹脇先生の前に出ると、国立大学の学部長や公私立大学の学長職にある元院生・助手達が、管理運営に時間を費して勉強不足を自覚してしまうために、そろって悪事露見の不良少年のような顔つきになってしまう。すっかり大人になった弟子が、人前でも心の中でも憚りなく尊敬しつづける師はまさに至宝で、そうした人物と出会う幸運に私は恵まれました。現在教授の祿を食んでいる者に竹脇流は無論通用しません。

特に理学部における生物科学は、長い歴史をもつ教室の組織と運営形態を譲るべき伝統であるかのように維持してきたために、勇気を出して改組

する必要に迫られていました。当初の計画と比べると矮小化した規模となり、それ故に改組の第一段階に位置づけられる内容ですが、理学部ならびに大学本部の暖かい御支援によって動物学・植物学・人類学の3専攻を単一の生物科学専攻に改組拡充する運びとなり、関係各位に感謝いたしております。ここに至る約6年間の迂余曲折のある概算要求の書類作成や諸段階での会議の実質的世話人を何の因果かやるはめとなりましたが、それらのファイルを整理引き継ぎした今となってみると、理学部の頭脳集団の学問上の能力の面ももっと利用させて頂けばよかったなあと思います。竹脇先生が、「一寸勉強時間を損したが、今やらねばいつできる。わしがやらねば誰がやるというんでまあええじゃろ。」と許して下さるのを期待しているのです。しかし体力と時間に限界のあることを感じさせられ、それだけに充実した理学部での生活でした。研究上は、ペプチドホルモン受容体の遺伝子発現、培養ニューロンの老化、脳の性分化、神経分泌細胞の可塑性と老化、ホルモン受容体の比較内分泌学などが、院生・助手・国内外共同研究者の尽力によって進展し、論文は多数出ましたが第一著者となった原著論文はこの10年間ごく僅かにすぎません。しかし、思い残すことはありません。

理学系研究科・理学部の発展を心より祈っております。有難うございました。

